

近藤俊太郎著

## 『親鸞とマルクス主義』 ——闘争・イデオロギー・普遍性——

(法藏館・二〇二二年)

### 大谷 栄一

本書は、近現代日本の「親鸞理解とマルクス主義の関係史」(本書二八頁。以下、頁数のみ表記)を主題化し、その歴史像を初めて明らかにした労作で、五百頁を超える大著である。「親鸞理解の近現代史」(一〇頁)に斬新な問題提起を行った注目すべき成果である。

本書の構成は、「第Ⅰ部 仏教とマルクス主義——解放と阿片の間」「第Ⅱ部 戦時日本の親鸞——危機の時代との向き合い方」「第Ⅲ部 戦後日本の親鸞——起動する社会的実践」の全三部からなり、戦前から戦中を経て、戦後の「親鸞をめぐる近代の思想」(四頁)が通史的に分析されている。

#### 一 本書の概要

まず、「序章 親鸞とマルクス主義への入射角」では、本書を貫く著者の問題意識と立場、本書の課題と方法、対象理解の認識論が示されている。

本書の対象は親鸞その人ではなく、親鸞理解である。近代の

知識人たちに親鸞がどのように理解され、どのように語られたのかを問う。著者によれば、近代の親鸞理解を主題とした成果は少ないものの、二〇〇〇年代以降の近代真宗史研究で成果が産出されてきた。しかし、それらの研究は清沢満之とその門下に始まる真宗大谷派の「近代教学」を軸としたものであり、親鸞理解の近代史を「単線化」しすぎているという。それに対して、著者はその「複線化」を試みるために、マルクス主義との関連で構築された親鸞理解に着目する。なぜかという点、現在につながる親鸞理解や近代という時代の歴史的経験を考えるうえでそれが極めて重要だからである。

そうした近代日本における親鸞理解の思想経験を検討する際、著者が注目するのが、普遍性と否定性である。著者によれば、「仏教は、現前することのない普遍性であるが、歴史的现实に對する根源的な否定のはたらきとして作動し続け、信仰主体の実践を惹き起こす」(二四頁)。仏教の有する(と著者が考える)「否定性をもたらす普遍性」(二三頁)と、歴史内存在としての信仰主体との関連性の分析が本書の課題として措定されている。ただし、信仰主体はそうした否定性を貫徹できない。それは、信仰主体が「超歴史的契機と歴史的契機、普遍性と特殊性、宗教的立場と社会的立場といった二重性」(二四頁)を抱え込んでいるからである。著者のいう普遍性とは、そうした二分法や二元論を否定・解体するはたらきであり、普遍性と否定性(さらに超越性)が本書を貫くキーワードとなる。また、「宗教的立

場と社会的立場の二元論」(三二頁)が近代宗教史を通底する課題と捉えられ、信仰主体によるその二元論の総合や克服が本書全体を通じて繰り返し問われている。

第I部では、明治後期〜敗戦後の仏教とマルクス主義の関係史が分析されている。

「第一章 高木顕明と初期水平運動の親鸞——非戦と平等をめぐって」では、社会主義・マルクス主義との関連が初めて論じられた親鸞像として、日露戦争時に非戦論に立った真宗大谷派僧侶の高木顕明と、初期水平運動の担い手の西光万吉や栗須七郎の思想を考察している。彼らの思想は、現実の差別的・権力的状況を批判する手がかりを親鸞思想やマルクス主義から摂取したことで成り立っていた。その親鸞理解は、真宗教団の正統的親鸞像の受容ではなく、近代真宗総体への批判を意味していたという。近代真宗の親鸞像は、「真俗二諦」(親鸞の宗教的・社会的立場を分断して別領域に位置づける教説)の枠組みによって護国思想的に捉えるという特徴があった。

「第二章 反宗教運動と仏教」では、一九三〇年代初頭のマルクス主義の宗教批判論にもとづく反宗教運動への仏教徒の応答が検討されている。当時のマルクス主義者による宗教批判は宗教Ⅱ阿片論に立脚した宗教の社会的機能論に集中し、それに対する仏教徒の反論は宗教的立場を重視するものが多く、内面性や精神性を特徴とする宗教が現実状況とどのように向き合うのかといった視点がなかったため、両者の論争が理論的次元では

全くかみ合っていないかった。その背景には、宗教的立場と社会的立場の二元論の問題があり、両者の間には「深い分割線」(二四二頁)が引かれていたという。

「第三章 佐野の宗教論——宗教批判と親鸞理解」では、佐野の宗教論、親鸞論が扱われている。当初、親鸞に社会改造の可能性を読み込み、親鸞を「革命的宗教家」と捉えた佐野は、しだいにマルクス・レーニン主義にもとづく宗教批判を繰り返す。しかし、転向声明(一九三三年)を発表した刑務所時代に宗教Ⅱ阿片論を清算し、親鸞の罪障観から否定即肯定Ⅱ天皇制肯定の論理を組み立てる。さらに、戦後の佐野は刑務所時代の親鸞理解を構造的には継承しつつ、その内容を戦後の価値に組み換え、仏教社会主義を主張したことが詳細に描かれている。こうした佐野の思想変遷は、社会的なものから内面的なものへの転回を意味し、佐野にみるマルクス主義と宗教の問題は、内面性と社会性に分断された近代的二元論の枠組みにあった、と著者は分析している。

第II部では、戦時期における親鸞理解の変遷が考察されている。

「第四章 戦時下本願寺の聖典削除と皇国宗教化」は、一九四〇年に発生した真宗本願寺派の聖典削除問題(親鸞の『教行信証』化身土巻の「主上臣下」等の文言を伏字等の処置をするよう指示された出来事)を取り上げる。この問題をめぐる宗派内の議論から「真宗の皇国宗教化・皇道化」(二〇四頁)という戦時

教学の形成が進み、この問題が本願寺派の戦時体制への再編過程の一段階であったことが詳らかにされている。聖典削除をめぐる論争では、親鸞理解が問題の核心であったという。

「第五章 戦後親鸞論への道程——マルクス主義という経験を中心に」では、一九三〇年代の反宗教運動と「国体論的親鸞像」、家永三郎の『日本思想史に於ける否定の論理の発達』（一九四〇年）、そして戦後親鸞論の出発点となった（と著者が高く評価する）服部之總の『親鸞ノート』（一九四八年）が分析されている。家永は歴史を超えた宗教の契機に着目して、聖徳太子から親鸞に至る「否定の論理」を論じたものの、その議論は歴史的现实の否定には展開しえなかった、とその限界を述べる。また、戦前から戦時中の「護国思想的親鸞像」を反転させ、親鸞に世俗的権力への否定を読み込み、「権力と対決する親鸞」像を提示したのが、反宗教運動の担い手だった服部之總である。服部は、親鸞の信仰に歴史的・社会的意義を見出した。ただし、親鸞の宗教的立場と社会的立場を総合させる試みは課題として残され、戦後親鸞研究に継承された（それが第六章で論じられる）。

第三部では、戦後日本の親鸞理解が現実社会における社会的実践を起動させたことが論じられている。

「第六章 二葉憲香の親鸞論——仏教の立場に立つ歴史学」では、二葉憲香の仏教史学と親鸞論が詳細に分析されている（ちなみに、著者は二葉の孫弟子の立場）。二葉仏教史学の方法は戦

時下の皇国史観と戦後の唯物史観との格闘によって形成され、「仏教の立場に立つ歴史学」（一九五〇年の二葉の言葉）として定位された。また、二葉にとって、研究主体の仏教理解こそが仏教史把握の鍵であり、二葉は、研究主体による「仏教的主体」（三二六頁）の確立を繰り返し説いたという。そうした立場からすれば、仏教史学は宗教的立場と社会的立場の「対決」によって成立し、総合されるべきものであった。二葉は仏教の主体性という次元を導入することで、戦後仏教史研究で分断され、無媒介に併存していた宗教的立場と社会的立場を親鸞に即して総合した、と著者は評価する（補論も参照）。さらに、神社問題への批判的関与など、二葉史学の実践性も紹介されている。

「第七章 戦後日本における反靖国運動と親鸞」では、真宗関係者を主な担い手とする反靖国運動が検討される。戦後日本の社会運動で、宗教的实践という性格が最も濃厚なのが反靖国運動であったという。一九六〇年代後半の靖国神社国家護持をめぐる論争（二葉も関わった）が紹介されたのち、真宗関係者による反靖国運動が一九七〇年代の教団改革や八〇年代の真宗独自の遺族会結成に至り、現在も続く裁判闘争に展開していく歴史が描かれている。運動の担い手たちには、反靖国運動は信仰の運動でもあり、戦前の国家権力を支えた真宗信仰を切断し、「真宗信仰の普遍性」（四三三頁）を回復するために不可欠の営為であった。

「補論 近代真宗史への入射角——宗教的立場と社会的立場の

二元論とその超克」は、著者の研究履歴をまとめたものである（二〇一六年の研究会で発表）。マルクス主義という視点から見た戦後親鸞論への道程は、高木顕明―初期水平運動―反宗教運動―服部之總という「四つの峰」（親鸞理解を梃子にして宗教の社会的意義を問う立場）と、これらの高峰に対置しうる「別の稜線」として、清沢満之とその門下による「精神主義」―家永三郎（宗教の超越性を親鸞に即して探求する立場）がある。こうした両者を総合したのが、二葉憲香だったという著者の「見立て」が示されており、本書のモチーフを知ることができる。

「結章 まとめと展望―親鸞・マルクス主義・近代」は、本書の結論である。本書全体に関わる重要な論点として著者が挙げるのが、宗教的立場と社会的立場の二元論である。この二元論が近代日本の宗教者たちには避けがたい思考の枠組みになっており、内面性と身体性、超越性と内在性とも重なり、絶対と相対、無限と有限、精神と物質、主観と客観にも変奏できるといふ。この宗教的立場と社会的立場の関係性が問題であり、両者が無媒介に併存すれば、空虚なイデオロギーや現状追隨の姿勢になるが、緊張関係を構築すれば、「自己と現実の根源的否定性に基づく闘争」（四八三頁）が歴史に現出し、二分法の解体や超克となると強調する。また、本書が課題とした親鸞理解は、内面性や宗教的立場に関わる問題であり、それは「超越性・普遍性へとアクセスする拠点」（四八二頁）ともなった。宗教性は統治権力に利用され、動員された一方、その統治権力

を無効化しかねない能力がつねに秘められていた。近代日本の親鸞論は、親鸞を語る者の存在被拘束性を引き受けながら――キリスト教やマルクス主義と並ぶ――普遍性や超越性にアクセスしうる数少ない方法のひとつだったと著者は説く。

## 二 本書へのコメント

本書の内容はきわめて豊富で、提起されている問題は多いが、以下、①二元論の問題、②超越性の問題、③研究者の立場性と普遍性の問題についてコメントしたい。

本書の核心的な論点の一つが、宗教的立場と社会的立場の二元論であり、著者はそれが「近代宗教史に広範に通底する問題」（二九〇頁）、「近代宗教史を貫くディレンマ」（四五九頁）と把握する。近代宗教史にこうした二元論を見出し、その関係性から、「親鸞理解の近現代史」を精緻に分析した点は、本書の大きな成果である。ただし、この二元論は、近代宗教史研究を貫くディレンマでもあるのではないか。この点は、すでに繁田真爾「二〇二二」によって指摘されている。繁田は別のテキストで、近代仏教史研究の開拓者の一人である吉田久一の「内面派―社会派」というリジッドなカテゴリー論をどのように内破（脱構築）するかが近代仏教史研究の課題であると提起している（繁田「二〇一六」）。本書では、二つの立場を媒介する三木清の「信仰主体の実践性」（二九一頁）や、妹尾義郎の言説に見る「社会変革を可能にするだけの宗教的立場の解明」（一

二九頁)といった、リジッドな二元論を内破しうる視点が提示されており、この問題は近代宗教学研究の方法論として今後も議論されてしかるべきであろう。

近代日本の知識人が普遍性や超越性にアクセスする際、「キリスト教とマルクス主義と仏教」(四九五頁)が選択された。なかでも浄土真宗が注目されたのは、キリスト教やマルクス主義に一神教的な思想的共通性を見出しやすかったからではないか、と著者は述べる。著者のいう超越性は、外在的な超越性を意味しているといえよう。しかし、超越性には内在的な超越性もある。日本の近代仏教史には一神教を否定した汎神論という特徴が見られるが(吉永「二〇二二」)、これは、いわば、内在的超越という超越性であろう。つまり、本書のいう超越性は、真宗以外には当てはまらないのか、という疑問が生じる。

仏教における「否定性をもたらず普遍性」(二三頁)の指摘が、本書ならびに著者の仏教史研究の重要な特徴であろう。二葉憲香の仏教史学から「決定的な影響を受けた」(五〇七頁)著者にとって、研究主体の立場性と実践性、「研究主体の仏教理解」(四六一頁)が決定的に重要な意味を持っていることは、補論で強調されている。普遍性の問題もこの研究者の立場性に大きく規定される。近代日本の仏教理解の方法として、著者は序章で本質主義的把握と構築主義的手法を挙げる。仏教的主体性によって研究を行う立場からは本質主義的仏教理解がきわめて有益で魅力的だが、分析よりも評価に傾くとその欠点を指摘

する。一方、構築主義の立場からは、仏教の普遍的性格は近代の構築物だと説明できるが、それですべてが説明できず、慎重な議論が必要であると述べる。

評者の見るところ、本書における著者の仏教理解は構築主義的な把握が基本だが、本質主義的な把握も見られる(たとえば、「仏教本来の超歴史的普遍性」(三三八頁)の指摘)。本質主義的な仏教理解に立つ二葉が示唆した仏教的主体性という研究者の立場性は、研究の方法論をどこまで規定するのか、あるいはしないのか、今後、著者と議論ができれば、と思う。

本書は、現在の近代仏教史研究の豊潤な成果を象徴する一冊であり、本学会の会員にも広く読まれることを願う。

#### 引用文献

- 繁田真爾「二〇一六」 「吉田久一近代仏教史研究の開拓と方法」  
(オリオン・クラウタウ編『戦後歴史学と日本仏教』法蔵館)  
繁田真爾「二〇二二」 「書評 近藤俊太郎著『親鸞とマルクス主義』」  
—— 闘争・イデオロギー・普遍性」(『宗教研究』四〇三号)  
吉永進一「二〇二二」 『神智学と仏教』法蔵館

(佛教学教授)